対詩考

はひふへほ　上

八

和書門
類
二七〇九六號
九二函
三架
一〇冊

内閣文庫
和書
類
二七〇九六號
一〇冊
二〇二函
九架

内閣文庫		
番號	和	27096
冊數	10	(8)
函號	202	191

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

冠辭考巻八

波比布倍保

○波部 十五

はるびの　はねかづら　はる山の

はるされ　はる草を　はるがすみ

はなぐはし　はゝそはの　はるとりの

はふくずの　はふつたの　はや川の

はなぐかの　はしむかふ　はしたての

○比部 五

ひさかたの　ひなくもり　ひうるかみ

明治十二年購求
不二庵田氏藏書記

ひもかゞみ　ひくあまれ
○布部　六
ふせやたつ　ふせやたき　ふき海ぢを
ふるころも　ふぢごろも　ふぢなみれ
○保部　一
ほとゝぎす

冠辭考巻八

波比布閉保

○波部

はるびの　かきらとすゞ

武烈紀に。播屢比能。箇須我鳴須擬。繼體紀に。播屢比能。哿須我能倶儞々。萬葉集巻ノ三に 赤人哥 春日乎。春日山乃。云云。こは春の日の霞むといひかけつ。春日乎とは。於のづから通ふ手にて春日にかすむといへる也。又乎は之の語なる。之を乎と誤れる事集中に多し。
○かすがてふ語のおこれるなれば新撰姓氏録に。大春日朝臣の條 仲臣令家重千金。委糟為堵。于時大鷦鷯天皇臨幸。

其家詔號糟垣臣後改為春日臣とありしが。地の名を
もて縁る之。さて春日とかくことハ右のごとくなるよしの
まくらことばなれバ。おのづから春の日ハ霞む故なる
故まてもかくべし。その明日香を飛鳥とかくこと同じ下なぞ
類之かけ語ハ古のならひにて唱へて字を用ゐることのうへ
なる之。此糟垣のことハおほつかなき事に似てれども うるはしき人春日のかすむと
つけしハいひけの語のかへて。春日とかくハ借字なると知るべき
ことそのある説あるか。ハ末の
さればそしても疑ふべからず
かるかまたつ　のの心なりけれ
万葉巻ノ七ニ。春霞井上従直爾道者雖有君爾将相
登他回来毛。これハ春霞の居るといひかけたり。巻十四ニ。

可須美為流布持能夜麻備爾ともよみて。かゝるハ霞の
みゆるといふに同じ。
井上てふ所ハ大和にあり。光仁天皇乃右井上
内親王もこゝより出たる名之。上の字ハ旁の意にて、うへにはあらず、城のへと
本乃上とも
書ぐなれし。
もみぢ山乃　もみぢひさしくて
万葉巻十三ニ。伊勢國山邊五十鈴原の大宮の歌 春山之四名比盛而 此比ハ潤ふべきを今伊
のごとく唱ふ かも書る之 秋山之色名付思吉百磯城之大宮人者云云。
これ宮人の姿にあそびすぐしたるを。秋山のもみぢばにたとへし
なる葉ゆくにたとへ。艶色を秋山の紅葉にたとへたり。

さてしなえとハ既に秋山の下部留。夏草乃之奈要る
どいふ條にいへるごとく、志奈要乃假字之紛るゝところにて四名
比とあるハ比ハ其のありさまをいふ辞にて四名要比栄
といふべきを比の辞を添いふなる要を略きてと略
きて比を添るハ物語なれど女乃我にすびきあるを
なよびあることいふがごとく、此なるにハしなえるえひハぶりそも
めくともいふ辞にてその多様のなる此ハしなえるえめくなど
此巻三の哥の言ハ人を慕ふ意也
びめでもしてしえ
ものぐらしと此山岳
本の葉も知つる
うらんなるやう
いふ言なるをおもへ。巻二十に、眞木葉乃之奈布（此布も濁るべき係なれバ）
也濁る字のぬく
嘽ゆめりて下も同し。勢能山之奴波受而吾超去者木葉知
家武。巻二十に、多知之奈布伎美我須我多乎。云云。

ぬれて思ふさと
いふぞてあきバ
捨のつれて枝葉
めつくかるゝ
この之奈布の布も上乃四名比の比も音を通はしていふ
のにして、之奈要米久といふべきを略けるも上に同し。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
さればこそ
ちることに
万葉巻二に、高市皇子尊の殯の時、人麻呂、春鳥之佐麻欲比奴禮者。云云。
これは春の鳥のさまよひいづるを皇子をしたひなげくに
たとへたり。今の字古へよりさ迷ふとよめり。○春鳥と
書てうぐひすと訓るもあれど、これハ百鳥の集る
春なるをばしとのいひて、一つの鳥をさすにあらず。集中とわ

ちるまでもみれ且下に波流揚奈宜とよめるたぐひあまたなし。
今ぞもえるくさのしげみ之
もゆる草と　うまくらひ山
万葉巻九に。泉川邊のうへに。春草馬咋山自越来奈流雁使者宿
過奈利。てハ咋山をも山と馬くらひといひかけしなるべし。楢山を
舊衣著ならしの山。振山を袖ふる山などいひ下せし類ひ之。
また熊野と志熊野といふめく。咋山と真咋の山ともいふ
と。そゝ真と馬のくひといひなして。まくひの山とよめるなるべし。
咋山ハ神名式に。山城國綴喜郡に咋岡神社とあるに
同じ所歟。泉川ハ相樂郡に属とも。綴喜も隣乃郡
古事記に大山咋神まします神といはひて咋山といふなり。

そのかれハ之。層れ越すといひふれハなし毫くとも。
ちるやなぎ　かづらき山
万葉巻十一に。春楊葛山發雲立座妹念 巻ノ五並ニ十一ニも此歌あるをうへ六
柳の鬘といひかけり。楊を鬘に造るよりかづらといへる歌也。巻五に。波流揚奈宜可
豆良爾乎利志烏梅能波奈とうかゝれハ。今もちるや志
ぎとよむべし。上乃春草もされるまでも訓り。
ちるのくし　さくらのめく
允恭紀に。天皇衣通姫の藤原の宮へ幸まし。井のほとりの櫻花を見給ひて。波那具波辭佐區羅能
梅涅許等梅涅麼波椰區波梅涅孺和我梅豆留古
羅。こハ花の中に櫻をそ愛されハ。花ぐはしてふ語を冠らし

せちまへつゝさそみく梅のめくみに比雌とめでん物ちからバなや
き時ちゝめづべきうし物なとのさまへうまふかりて愛おしばなど
繕りよとくようめでぶりしとはへそしそまふく。且くくし
てふ語ハ既よ名くゝきれ條よひつ。於ても見ゆなどハ古事
記のあり遠津年魚目目微比賣と。日本紀よハ年魚眼
眼妙媛と書て。ちよ微妙とくゝしと訓しをもおもへ。
○万葉巻十一よ。花細葦垣越爾。直一目。相視之見故。
千遍嘆津。ゝハ實の景とみてやぶそ譬へよそつしれハ冠辞よ
あるを。前乃ハ梅の用へど業をせのひするなる冠辞之。
ちゝそゞれ　そくのとことハ

ちゝ實の事ハ知の部よいそろ。万葉巻十九よ。長哥 知智乃實乃。父能美許等。波播蘇葉
乃。母能美已等。云云。巻二十よも。波々蘇婆能。波々能
美許等波とありてハちゝその木と母と語の似かよひ
ちれバかくいふのみ。さてちゝそハ和名抄よ柞（ハ和語抄云波々曽。石田之漢）
木名。堪作梳也とあるそ。いそゆる石田のとみてちゝ柞
原。佐保山のちゝそれのちぢみどいへるはちまこそ。秋ハ
葉をまむりのこ。柞の字ハあてつけしなど字代換ハそれて用字し
ちゝさずゝき　ほゝづゝる君ふめのまで
神功紀ヌ神の宮の幡荻穂出吾也。万葉巻十四よ。爾比年路
能許騰伎爾。伊多禮婆。波太須酒伎。穂爾氐之伎美

我見延奴己能許呂にいはすり乃あれつるとさうその穂よ出るよちてりふう。巻十よ。秋寄花 吾妹兒爾相坂山之皮為酢寸穂庭開不出戀渡鴨。猶かゝれも右のぬく穂にも出ともでつゞけたり。出るといふハ心の下さとりその意ことえ。○ちかいはずさきて穴。奈良人とありてハさゝ穂くよ見えねしすゝきしゆうしきをつしきれとまり紀よ幡荻。万葉巻一よ。人麻呂 旗須為寸。四能手押靡なとせるよそれバ秋野の中れきとさハ物よれ見るく狭まて。葉もなくてすゝきをあれハ幡ずゝきと云ましむ。そのよしハ奥と紀よも祝詞にも鰭乃廣物。鰭乃狭物といひ。和名抄よ鰭ハ波太俗云比禮とあり

古今集の墨滅のうたとして此歌を志のすゝきかくれてすむ志わたるかなところは語かれぬをそれよりさきてものすゝきハ穂よ出ぬ物をいふ穴歯に語りとかまふり集中よ布歯のきる田の穂よハ出ぬあるを穂ほよ出るを物とりて穂よ出るといひ下せし歎ひ古今よ多きことをいふてみんなうけん穂の字をもいらそれとあまんや。

かく波太とも比禮ともいふハ即旗領巾などより魚のさ海りたを。ひるかへしはさうんあれバ也まとさとも旗の靡き。領巾と振などやうくてそさハいひしなるべしのの草れたりし。と花が袖などに見あしてるも。お似たる意あるを。又皮の字になるてハ下よ見。○巻三よ。博通法師が紀伊國の三穂石室の歌三首の中。皮為酢寸。久米能若子我。伊座家留。三穂乃石室者。雖見不飽鴨。こハいとも見るねど。新強ていふたき。すきハ穂のこもれるが見えて濵よ咲出る物なれハ。古今とつひうけしよ。古今と久米の誤りなり。又末よ三穂といへる一隔ておさるともいふべしか。古今集よあるよどこそ我こそ下にかひしが。穂よ出そ人よむきそれよ久ちそのハ。出そてよたえ

かれハ今しく美なりともいふべかれど。猶おぼつかなきもあらぬ
之冠辞なりとてすめるにハ。巻二に。大名児彼方野邊爾苅草
乃。東間毛。吾忘目八などやうなる多くの例ども。さのミハひ
ろず○又皮の字を書たるによれバ。たゞそのまゝを謂りて膚
なるよし。さて穂と皮とによりて外に開出るなれハ。
はだすゝきとハよばれけると覚ゆる時ハ右の久米といふ
も皮に篭る意にてつゞきしものとすべし。これ又奈良
人の一つの意ばかりにやあらざらん。猶前の幡によりてハ皮も
幡乃旗の意として借たるにや。おぼつかなけれバまた
あげ川。○又巻八に。目頬布君之家有。波奈須為寸。穂

出秋乃。過良久惜母。てのごと集中にいと多かるに花のこ
波奈須為寸とあるがおぼつかなけれバ。此奈ハたと誤る、
るにやとておもひしと。新撰万葉に二ところまで花薄
と書。そのゝち古今集和名抄などにも花すゝきとある
をみれバ。既に奈良のすゑには花すゝきとよみし人も
有しとうけられ。今の都となりてハ。よろづみやびかなる
ところめハ。たゞその花すゝきてふのみなるべしときこえ
つまでよみけるならんと覚ゆ。猶これハ此ごろのすゝきてふも
奈良人のひとりいひ出てしこそあらんかし。花ハ皮にも花
勝見などもいふなればしらずとすにハあらねバ。猶

むかしといへハ都からうしそのえぞり。

三穂石室ハ此哥の端の詞よりれハ紀伊國の三穂に
ある石室之纔なるに久米若子ハ那賀紀乃古注に弘
計天皇の御少名之とあるを或説よつハ紀伊なれハ
その御なまにあらず。又久米乃仙もこゝにいふなる據
もなけれハむかしさる神などのませしをいふなる
といへり。今ならまに一たびいさるもなきのう。此意計
弘計のみことと。播磨にかくれたまひし日下部連
使主が。縮見山石室に入て経死したるなれハまたち
もなしめあつしハ石室におもしろんかし。さて紀と

古事記と此御事の傳異なるをおりしハ撥通に
師ハ紀伊の三穂乃石室に此みくかちのおもせし
である傳とゆうてよめるにや侍らん。古き書とみえたに
おる古のなまハひと定なるらずいひ傳へしも見えし
ハい。且久米の若子ハ彼位名なるに。伊座ぐるなど
あらめゆし。いま次の二首も神代のことよめるなる
えおぞねんあれハとくにあれみその伝なるとおぼしき。

きふるどの
ふえおどもあだん
いやとかみぐく

万葉巻二十に。波布久受能。多要受之努波牟。云云。こハ
上に玉かつらいでしぬとつぎきなるに同し。

○巻三に延葛乃弥遠永万世爾不絶等念而云云こも
はふくずのたゆることを長きたとへにしたり。

はふつたの　わかれしくれば

万葉巻二に延都多乃別之来者云云。猶あこハつゞき
これかづらのはひわかるゝを人のわかれにいひかけたり。

はや川乃　ゆくもしらずて

万葉巻十三に浪雲乃愛妻跡不語別之来者速川
之往文不知衣袂笑友裳不知てハ速川水の逝とつゞけ
たるのゆくを由加久と訓ハ、用を省加久といふ類にて。
加久反久なる故に延て調とかくぞ。

はや人の　さつまのせと　又はやひとのせと

万葉巻三に隼人乃薩摩乃迫門乎雲居奈須遠毛
吾者今日見鶴鴨とハ二つの説あり。一つハ或人のいはく隼人の
住ところなればさつまとつゞくること。ひとつはさつま隼人ハいにしへ
代より都にまゐりて仕奉るものなれバさつまも冠らし
めてよむにこそ。蝦夷が住所なれば夷が千島といふがごとし。
されバさつまの瀬戸とよみて、隼人の瀬戸ともつゞけし
なるべし。それは陸奥の千島なるを夷が千島とよ
めるごとし。二つには隼人ハ火酢芹命の裔にて、そのかみ海乃
幸人なれバ、隼人の幸とつゞけるにや。さつまてふ名も

かの海の幸ある隼人の住所に。幸島と云と異なることなき
ならんと覚ゆれバ也。幸と佐都と云ひ。島と麻とのかよふも例あり。
◎巻六に。隼人乃湍門乃磐母云云。是も一つの言ハ右にいひ
つるがぬしまいそらやくのさうまのせとらいふべしといひ
なれるなよなれハおのづからやく人と即さうまの状
のなまりいひなしたるなりも侍るべし。々の青丹よしなる
と異なれ。あをによしといひ。押してるなにハの
ことをおしてるやなどいつるなどく。
上乃哥ハ長田王被遣筑紫渡水島之時歌二首
とあるく。そち汝に我なれバ同じ度によむへく詠まれて。

めづらしとおぼせる意と見ゆ。

はしむかふ　おとゝのこと

愛妻。愛八師の愛を。今ハまとしと訓ずハまろし。愛べをいとしむハ。なおさなき人の頃ハ。はしきやしと訓べし。集中又なし。のつけそ。假名波志伎夜志と波志伎よもとも。と粉く。照しみて。よむべし。

万葉巻九に。弟の死去を哀しめる歌。父母賀成乃任爾。箸向。弟乃命
者。云云。まづ二つあり。先古き語の意をいはゞ。おさなきを
向ひて弟の命といふも。集中に愛妻愛嬬などかきてハ
愛しきつまともいとしづまともよむべく。又同じ愛妻の
字をうつくしきつまともよむべきにもあり。又愛八師。君之使とも
古事記にハ。波斯祁夜斯。和伎幣能迦多よりもあれバ。彼
これを照してみるに皆うつくしむてふ意也。向とハ心に
このむことなきと古へハ向しふといへるをハ。ふかき意をそいふなり。

なる二人ある兄弟ハおのが料(ブン)に理りのまゝにてもなるべし。○今一つハ箸(ハシ)と書るとおしき字とせハ今の人にても二人ある兄弟とはしらでおとゝひといふハ古へよりいへることにてかくいへるか。食(ヲシ)のみて具なる哥にもあることゝ古への心なるべし。

○命(ミコト)とハあがめてしたふ也。神代紀に名勢(ナセ)の命。名姉(ナネ)の命なども、あるがごとし。且此哥にてハ弟をなせと訓ハなるし。ねもごろなるべし

源氏物語に光君の小君に向ひ、空蝉のとのゆかりの殿ひにつまごと吾友なる勝秀名に仁賢紀の語をもていひし八なれおもふゆゑなるべし。古書に此事のあるを、ことにおほく人ひつるなり。

仁賢紀の小書に、古者不言兄弟長幼、女以男称兄(セ)、男以女称妹(イモ)といへり。故神代紀に天照大御神、御弟の素盞烏命をのたまふにも吾弟とのたまひて、あがなせとよみ、素盞烏命もなづちにむかひて天照大御神の名勢(ナセ)とのたまひしとあり。然れバ今こゝに弟命とよめるハ男どちのことなれバ神代紀の訓に依てなせと訓るハことわりなり。

はしだての　くらはしやま

古事記に、仁徳條に速総別王の哥、波斯多弖能(ハシダテノ)久良波斯夜麻袁(クラハシヤマヲ)佐賀志美登(サガシミト)云々。万葉巻七に橋立(ハシダテノ)倉椅山(クラハシヤマ)云々。こハ高き倉にハ梯(ハシ)を立てのぼるよしにつゞけたり。垂仁紀に、石上神宝を大中姫命に掌しめんとせられし時、姫の云、吾(アハ)手弱女人(タヲヤメ)也。何能登天神庫耶(イカデカアマノホクラニノボラム)。神庫此云保玖羅。五十瓊敷命(イニシキノミコト)曰、神庫(ホクラハ)雖高(タカクトモ)、我(アレ)能為神庫造梯(ホクラノハシヲツクラム)、豈煩登庫乎(アニクラニノボルニワヅラハサムヤ)。故諺(カレコトワザニ)云、神之神庫(カミノホクラモ)随樹梯之(ハシダテノマヽニ)。此其縁也(コレソノヨシナリ)とあるこれ也。保玖羅ハ秀庫にてかく秀ることにて保といへり。宝の音とするハひがことなり。和名抄にも、梯ハ和名加介波之、木階所以登高也とみえて、古への庫ハいと高く構へて、下ハ柱のみたかくあるハよのつねなり。故に梯ぞへのぼるなるをなせ

しるし。今も熱田神宮にては さなから名の庫あり。

○又仁徳紀に。右の冠し玉ひし時の哥なり古事記にハ見えず。破始多氐能佐鐵始枳椰摩茂云云。梯ハそばだてる物なれバ。険山にかふ冠辞にもせり。

○万葉巻十六に。能登国の哥 堦楯。熊来乃沼良爾。新羅斧堕入和之。云云。堦楯。熊来酒屋爾。真奴良留奴和之云云。

堦楯ハ共に借字なり。上の梯樹に同じ。これハおぶつのならはしと強ていへど。和名抄に。桟ハ板木構険為道といひ。字書にも棚也閣也。閣木為桟といふに依ハ。桟にも梯にも棚をわたしたる木をも梯といふなれば。梯樹の熊来とハつゞけしなれ。後世橋のくだりと云ハ此にあたるなり。

三河のくにゝ名あり。名塩川の蜘手に あなかちにて梯に よれるなどいへる ぬと惑ふ人多き ぞうし。

倉梯山ハ大和国の十市郡にあり。熊来ハ和名抄に

能登国能登郡熊来久万佐

(一)比之部

ひさかたの　あめ あま 天 月 みやこ 此外天の物にかゝる冠辞にて

古事記に。倭建命乃御哥 比佐迦多能。阿米能迦具夜麻。云云。

此冠辞始てみゆ 仁徳紀に。継体の女鳥の哥 比佐箇多能。阿梅箇儺麼多。云云。

万葉巻二に。久堅之。天河原爾。巻五に。比佐迦多能。阿麻遅波等保斯。云云。こハ先ひとのいへることといひて後なりわびのえハぞんそハ万葉にもてをど久堅能。久方乃などゝ書く。神代紀に。清妙之合摶易。重濁之凝場難。故天先成而地後定とあるをおもひ合せて。天のかたまり成るハ

既に浄御原藤原の宮の御時に至てハ用と體にとりなして用の語ら之の辭ともいふもなれバにあれど、約る上つ代の語にハ必なきなく。

地より既に久しくなれバ久く堅き之天といふといひ又天の成しハ右ならハその然バ地よりも久しき方てふ意をもいへり。真淵今思ふに。上つ代にことぞの下に之といふは必體の語にそへてこそ、用の語につゞくことまなし。然れバ堅きとハ堅乃語なれバ、久しく堅き之といふ語ハなるべからず。堅きとかくハ誤いひても猶同じ。又久しき方のてふハ之の辭ハいふべくなれど、方てふ語のいひざま古への人乃言とも思えず且凡の語と神代のかきつたへにまれなるぞ意ぬるハなるが古へ乃語のかよづる様ハみやびなかりし、いさゝらん。右れ二つハ意つらなくして本もこれからに古き古語をもそてかうなく改めひがれるもなるべし、さらバ年尺にかりひて漸おもかげしきなりあるそれハ先久堅久方、などの例の借字なり。さて天の形ハまろくして虚なるゆゑに、匏の如乃まろくむなしきなりと知りて、匏形の天といふなりと思ふ。續日本後紀に、興福寺の僧が奉る長歌に瓠葛乃天とよめりし。荷田宇志の比古加多乃阿米と訓まれしぞ。即是之なる。瓠ハ匏の意にて、圓匏にて瓠の葛ハ借字にて象の意且ひさごの事どもかきのもとを略る。などく例ハおほねにいさし。禮記ていふかしかみえて、大報天而主日也。略。掃地而祭。於其質也。器用陶匏。以象天地之性也。鄭玄云。觀天下之物無可以稱其徳。てふも。陶ハ土器なれバ即地に象つる。匏ハ空にみなりて内の虚なれバ天の形に象とするなり。此外にも天地の形に象るべき物なけれハ、いかにもさるべくぞ思ゆ。唯天産の物そ

まろ匏の形てふまりハ後世のいひ言まるとすどいへる。

弾丸雞卵の喩ことしあれバ此その匏の形といふことバよしあることあらずや

よせるこのことわりハ徳といふもじやことハこれとも思ひ合すべき也。且仁徳紀に全匏を宇都比佐碁とよめり。和名抄に瓠雨と宇太加太とよめるも虚象のこゝろをおもひむかへてよし。

○巻四に久堅乃雨毛落糠まで久堅乃昨夜雨爾将懲鴨。こハ天と雨につゞきしてつゞけたるも巻の八にもつゞけあり。

○巻八に久方乃月夜乎清美巻七に久堅之夜渡月乃云云。こハ天の物なれバ月にもつゞけたる此おなじく天のおほつゞけたる多かれど、おもひかへるに秋ハあけぼ

○古今集に久かたのひかりのどけき春の日にては、空の光といふなるべし。久かたの中におふる里なれバと桂

久方の月の中あるも此一首に従ふて此ハ論なきなり

此里といひたりしるハ月とつゞけると二度三度ひろろきをせふる故ハぬでむの意をいふと。暗きによりて秋ともつゞけれバ、その秋より待ちて月とだにつゞけるおぬしおかしき桂にて詞をさへ隠せしハ一かたつゞき後の世にまゐるなり。

○また巻十三に人麿家集久堅之王都乎置而草枕羇往君乎何時可将待。こハ皇の都ハ天にたとへたるなるべくもつゞけたる也。人まろの比よりてハもう君きこえたるきても此也。

ひさかたの　うきひの坂　又ひのさかに

万葉巻二十に比奈久母理宇須比乃佐可乎云云こハ
曇る日の影ハ落ぬれバ落る日てふ意にいひかけたり
巻二に且覆日之入去者とよめるこゝろし巻十四
に上野乎比能具禮爾宇須比乃夜麻乎古由流日波
といへるハ日の暮に日影のうすきをいひてたる名と同し
うすひの山ハ景行紀に日本武尊自甲斐北轉歴武藏上野
西逮于碓日坂和名抄にも上野國碓氷郡と見えたり

ひかるかみ　はたをとめ

万葉巻十九に光神鳴波多嬬嬬携手共将有等念
之爾云云こハ此妻が名を機娘と云しなるにかけていひかけ
たるなり音をたつる物なれバ機をゐるさまをもいふ
也古事記に苅幡戸辨神代紀に栲幡千々比賣なと
いふもそのわざをする故に名におひてその名とせし
女に多き也

ひもかゞみ　のとか山

万葉巻十一に紐鏡能登香山誰故君来座在紐不開
寐こハ鏡の裏なるひもハ臺にゆひつけん料なれバそこに着おき
て解ことなきさまに莫解そといふべきを莫と能と加
と紀と音の通へバのとか山といひかけたり古へハ莫の語ハ語の上にまへ
以ても莫来曾莫戀曾莫和備などゝ哥の意ハ紐なる解そといふ山の名ハいかなれぞや

君ふへの手まかせる我に衣のひもとかはしてわれやはといへるを。
○或ものに、鏡を袋にもつてひもを結ひさけしといはしつ
鏡と袋に入管に納るはさらにみつから袋に紐あるのをそしてひもかたちをかへ
へき鏡のうらにこれ物に懸ん料のひもあれ。類聚雑要抄の鏡のかきとみえて
おりん万葉に神鏡をも懸るとよみたれをも鏡と懸るにもあきいへるは
うらくに紐のことなく。

能登香山ハいつとまた考へし。

ひくあこれ　まづさひあらん

万葉巻三に長哥 茵花香君[redacted]牽留鳥名津匝来與云云。
これハ絲に綱をともへる引にさるとくハよらず波の随に
漂よへるを人のたよりなづさひつて幸うしてまかなるにたとへ
たり。なづさひてふ語ハ仁部にいへり。○今本に香君之牛留鳥とも又一本
に香君乎死田鳥ともあるハ。牽を草の字に牽と書しを之
牛二字と見ん。留を死田二字に誤れるものにこそ。或人ハ牛留鳥をとかくとよみて
あこてふるあり。古哥に、みなくるあこのこひのひもなく。人を香のものにて経
るさみとなるとまちとへど牛の字をとろろと訓んもいかにぞや。引る哥乃、今を
雲のまゐどいへる詞ハ、ほの人の哥と共なれバあらぬ
ゆかし。さる乃外にも此事をを引て誤れるなり。

○布部

ふせやたつ　つまどひしつる

万葉巻三に 勝鹿の真間娘子が墓を過る赤人 古昔有家武人之倭文幡乃帯
解替而盧屋立妻問為家武勝牡鹿乃真間手児名
之奥槨乎云云。こハ屋のつまとつゞくなり。物の端をつまと
いへバ屋の檐をもいへり。さて屋ぶち家ぶちといふなる之

いふ語なれバ、立てる語を添て調をなす。且ふせといひ
切てつまといふハ冠辞の例之、語のたらハぬをおぎなひ
ふせ屋たきすゝとつゞくるをもおもひ合せよ。○ふせ
屋ハ集中に田ぶせとも、ふせ廬のまきいぶかしみて賤
の屋のひくゝて地にふせたるやうなれバいふなるべし
○妻問とハ、男女のおもひあふをいふなるに、此哥のうへに常解之
てと云て、つまどひしけんといへり。古へハよめる事を言問といへれハつまと 男女をさしてかのいふを鳴くして云る
をも婚ともあるをもいふ。哥によりて意得べし

勝鹿ハ毛九にも如く書なり。下総国葛餝郡なり
ふせやたき ますしさまし

万葉巻九に、菟原処女が墓の哥、廬八燎、須酒師競、相結婚、云云。こハ
ふせやにて火の烟たけり。ふせやたくとよめるを
しかふせやたきといひ切たるハ冠辞の例之、巻十一に
和名抄に助鋪屋古一云比太岐夜如衛上屋也といへり
難波人葦火燎屋之酢四手雖有、巻十三に、刺将焼少
屋之四忌屋爾、古事記に我所燧火者、於高天之新巣之
凝烟訓云須須之、八拳垂摩弖焼挙などあるも、むかし燎のことを
いへる也。且いづれの屋にもあれど、ふせやするぬき
賤が屋ハことにまずしくてある物なれば、しかいへるなるべし。
○須酒師競とハ気の進みてたけきをいふ。古
事記の海神の語に、須々鈎と、神代紀に跟踏鉤とかけるも

すゝろぐなく、古事記に、陏多良比賣の程に矢にうたれける時、美人驚而立走伊須
々岐伎（伊ハ發語下の伎ハ氣利又つゞ辞也）てふも、立走りしろきてるさるに外祝詞
などにも多し。然れバ今も壯士どもの心すゝろぎて、みな
もえたつすきそふなるを知べし。遠江乃言に喧嘩
の須志引と云ハ人と將て喧嘩を進るをいふものをいふハ
即同じ古てふ也（枝の先にすゝみもさるもいふも同じ、淫の下の手を濁るハ音便也）
みちゆきぶりを　引手のやま　又ハツミて
万葉巻二に挽哥　衾道乎引手乃山爾妹乎置而山徑往
者生跡毛無（此手ハ濁るべし。又の名ハ下にあり）此引出とえてるまうくハ、てハ先冠辞として今そ
おもへりの衾にハ組とやわらし著てそもそもいひろげて

覆へバその組と衾手の引手といふ名にて、引手の山に
冠らしめたりとせんにや。且幕なども乃手をほ出ハちと
いへと古へもさいひて今はおしなへしいふ也かさうらバ
道ハ借字也。或人是をふさまの戸の引手とつゞけたるといふハ紙して いくへも張たる障子をふさまの戸といふて見るも古へに
みえたる。式の神宮調度の中に戸の引手二勾　鐶径各三寸六分　とあるハ殺尚之
○今按にふすまて冠辞なるを以て衾てふ地乃名なる比
企手の山といふなるらんも。そのよしハ諸陵式に衾田墓
（手白香皇女在大和国山邊郡無守戸令山邊道勾岡上陵戸兼守）とある衾田乃田を略きて衾
道ともいふべし。且山邊道云々とあるをも衾てふ名に據
あり。猶ふすまハ衾の字をかくべきを手とあるハ誤なり。之乎の二つハ集中に相誤りて多し。又此乎ハ手の通して御佩手つるぎの地てふ類もあし

さて引手乃山ハ今なまにひきての山とよみなれし耳なれ
などひきたると訓べきにや。大和のひき玉ハ古き書にある
うゐに出てありさる時ハ一なまに引出しあるも引田と誤
れるともいふべきにや。これらのことも遊ておぼつかなけれど
捨がたくして挙るのミ。

ふるころも　まつちの山　うつとそへく
（古衣　真土山　きなれし山）

万葉巻六に。石上乙万呂の土佐の国へながされける時の哥。王。命恐。天離。夷部爾退。古
衣。又打山従。還来奴香聞。こハ古びあかづきて衣ハ夜く
あくひたりて帰りてふ成にハ万多宇知といふをとれの
多宇友都るにハ約めて信土山によびたるなり。○巻十

一に古衣。打棄人者。云云てふも同し。
○巻十二に。舊衣著楢乃山爾。鳴鳥之。云云こハ古き衣
ハ久しく着馴るゆゑに。楢の山に著なれしといひかけ
たるにてことを今なほ垢衣とあるハ誤りなるべし。既に
かゝる衣の所に云り。

ふぢころも　まどほにしあれば

万葉巻三に。宴によめる哥。須麻乃海人之。塩燒衣乃。藤服。間
遠之有者。未著穢。こハ藤の布ハ織目のあらくあるを
あるをば人の何どころの此所にまさきにいひけり。
さて藤衣ハ集中に。山田もる為が藤衣ともよみて今も

山賤なとハ、藤の皮乃糸しておれる衣とよめる也。

或人いはく、藤衣ハわが朝の古への喪服也。されども藤はかてもなく
て布に織らるゝ。織ても貴人の服ならし。葛布を用ひしと今せよ。
これハ古今集の喪に藤衣とよみ、且葛をもふちと訓するものあるをと
とのこえてはへるものゝ万葉巻十二の挽哥に宮のおほりハたへの布乃麻
きぬきれハとよみ、その外喪の時白栲の袖とよめるも多し。孝徳紀の
葬の制、令の義解、集解なども喪の衣ハ麻なる事見ゆ。これらより
見れハ古今集の喪に藤衣とよめるも実ハ麻衣なれども、すこしくいやしんそ
のことなり

ふちなみの　おもひまつはし

万葉巻十三に、藤浪乃思纏若草乃思就西君自二
云云これハ古今集に、ちひまつはれるとよめるものゝ、藤のつる
のまきにかられるにたとへて、悲しきさまにしのぶさまを
いへるも〇ふちなみてふ詞を、藤波藤並などゝ万葉にかける
ハ借字にて、実ハ藤靡(ナミ)の意也。なみひて靡く物
なれバなるべし。例ハ前の篠(サ)などの條にいへり。宇治拾遺物語に西宮殿
の大饗に藤花を作りて、松などにかけられしといふ事に、池の面に影う
つりて風の吹ハ水の上もひろくなびきたるまにまにても藤浪と
いふ事ハ是といふやうなる心ともあるとおもへり。古今集に池のふぢなみ
咲にけりとよめるとおもひて、いへるにや。此比既に古語の意ハ失てかく
万葉に水などのよせもなくて、岸の上に
あるをもふぢなみとよみしもある也。

〇保部

ほとゝぎす　とばたのうら

万葉巻十二に、霍公鳥飛幡之浦爾敷浪之屢君乎将
見因毛鴨これハ前に白なれ飛羽山てふ所に見るべく、飛とうけたり。
とばたの浦ハ或説に伊勢の名ねとあてたれど、おぼつかなし。

冠辭考巻八

大日本帝國圖書印

国立公文書館
National Archives of Japan